

おじいちゃんのお米とわたし

越谷市立荻島小学校 四年
三ツ木 心 花

「米作りは、今回で最後だよ。」

去年、おじいちゃんはわたしにこう言いました。

「何で？」わたしが聞くと

「体も動かかんし、機械もこわれたんだ。」と教えてくれました。

「ふうん。」

その時、わたしはそんなふうにしかな返事ができませんでした。

それから何日かたって、おじいちゃんは一か月間入院しました。そしてこきゅうが上手にできなくなり、たい院した時にはぎいたく酸素といって家に酸素の機械を入れ、苦しい時にはすうようになりました。お米の機械より、こっちの機械のほうが必要だよ、と思いました。また、こんな大変な体だったのに、一生けん命お米を作ってくれていたんだなと思うと、申しわけない気持ちでいっぱいになりました。わたしは一度米づくりを手伝ったことがあります、なえ作り、田植え、いねかりまでとても大変でした。でも、もっとお手伝いをすればよかったなと思いました。

それから、ご飯を食べる時に、お米がととても、大切に思えてきました。そして、味わって、食べるようにしました。おじいちゃんの大事な大事な宝物です。そまつにはできません。お米をずつとかんでいると、どんどんあまくなります。そしてじわーっと舌に味がのこります。わたしは、一つぶ残さず食べるようにしました。

おじいちゃんの作ったお米が残りわずかになりました。最後のお米は、家族みんなで真っ白の白米だけで食べました。お茶わんによそってくれたご飯は、キラキラしてて宝石のようでした。米つぶがシャキッとしていて食べるとホクホクして、もっちりしてあまかったです。みんなで「おいしい、おいしい。」と言って食べました。わたしも、いつもよりずつとおいしく感じました。おばあちゃんやお母さんは少しなみだぐんでいました。わたしも少し泣きそうになりましたが、がまんしました。そのかわり、「おじいちゃん、今までおいしいお米をありがとう。」とずつといたかったことを言うことができました。おじいちゃんは、「よかった、よかった。」と言ってくれました。

おじいちゃんのお米がなくなつてから、最近はスーパーで買うようになりました。お母さんといっしょに買い物していると、お米の種類がたくさんあることが分かりました。それを見ると、きつとおじいちゃんのように、みんな一生けん命作っているんだろうなと考えます。そう思うとありがたいです。

おじいちゃんのお米は一番だけど、他のお米もとってもおいしいです。わたしは今日も、ゆっくりよく味わって大切に食べようと思います。そして手を合わせて、「ごちそうさまでした。」と言いたいです。